

人間が妖怪になって幻想入りしたそうです

うみゆ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作者「この物語のあらすじ？なにそれおいしいの？」

霊夢「よくそんなのでこんなことしようと思ったわね」

作者「ぐっ…これから色々なことを覚えればいいんだよ！」

魔理沙「とにかくあらすじについてだが…作者のおつむが⑨だから
霊夢頼む」

作者「⑨とか言うn…」

霊夢「そうねえ、それじゃあわかりやすく一言で説明するわ」

魔理沙「ああ、頼むぜ」

霊夢「幻想郷ライフウェイ！…かしら？」

作者&魔理沙「…」

霊夢「あら、なにか違ったかしら？」

目次

一人の男の幻想入り	1
あらゆる物を纏う程度の能力	3

一人の男の幻想入り

「ここは森の中だよな？たしか俺は自分の部屋のベッドで寝てたんだが…」

夢遊病？いや、近くにこんな森なかったし夢遊病ではないはず…

いや待て、なんか思い出してきた

そう、あれは少し前…のはず

く 回想シーン く

「やっぱり自分の家のベッドが落ち着くよなくってなんだあれ？隕石？」

窓の外を見るとなんだか燃えている物体が飛んでいる

「隕石だよなあれ。初めて見た。ていうかなんかこつちに飛んできてね？」

そう思った時には隕石はもう目の前にあった

ああ、これは死んだな。お父さんお母さん先立つ不幸をお許しください。

てなわけで死んだわけなんだが、なんか神様？みたいなのが出てきて手違いで俺は殺されたみたいだから転生させてくれるらしい。

というか手違いで隕石ぶち当てられるとかなんなの？

でもまあ転生させてもらえるんだしどうせなら色々オプションでもつけてもらうか。手違いで隕石ぶち当てられたんだし

と言うわけで俺の生前行ってみたいと思っていた幻想郷にでも転生させてもうことにした。

く 回想シーン 終わり く

「つまりここは幻想郷でいいのか？俺の知ってる限りではこんな森はないはずなんだけどな」

どちらにせよとりあえずこの森を抜けないと妖怪に襲われそうだしとつとと抜けちまおう

そういえばなんだかすごい体のバランスが取りにくいんだけど。

あとなんかすごい力があふれてくるんだ。いや、冗談とか抜きで、本当に力が（ry

と思いながら歩いていたら小さな湖を見つけた

「すこし休んで行くか」

それで湖のそばに腰を下ろそうと近づいたら水面に反射して自分の姿が見えた。

その自分の姿を見た時には頭の中で様々な思考が頭の中を回っていた

俺って人間だよな？なんで人間のはずなのに羽(?)みたいなのがついてるんだ？おまけに尻尾みたいなのが生えてるし…

「あの神、次俺が死んだらぶん殴ってやる」

でも待てよ…妖怪にはなったがこれはこれで面白そうだし気にせず幻想郷ライフを楽しめばいいじゃないか！人間よりも寿命遥かに長いし！

こんなに暢気だったのかと自分でも驚きである

「さて、と。休憩も終わりにしてそろそろ森を抜けないとな。日も暮れてきそうだし」

グルルルルルル…

「えつと…これが妖怪なのか？」

休憩を終えていざ歩き出そうとしたところに狼のような大きな妖怪が現れた

「ちようどいい。俺の強さと能力の確認のためにすこし痛い目見てもらうぞ！」

結果 ズタボロに負けました。

グルルルルルル…

あ、これ終わったわ…転生して一日も立たずに同じ妖怪に喰われるのかよ。というか妖怪が妖怪を食べるって公式設定にあったっけ？

グルルルルル…グラアアア！

あ、食べられる。と思っていたけど特に食べられたような感じもしないしどういふことだ？というかあの狼みたいな妖怪もいないな…代わりにBB…日傘をさしているお姉さんがいたが

「うふふ…大丈夫かしら？生まれたての妖怪さん？」

あらゆる物を纏う程度の能力

「大丈夫かしら？生まれたての妖怪さん？」

「えっと…BB…」

と、そこまで言ったところでいつの間にか首筋に日本刀？みたいなのが触れていた

「それ以上言ったらあなたの首が飛ぶわよ？」

ひいひい!!？なにこいつ!!？笑顔で殺人予告!!？いや、人じゃないな、妖怪だから殺妖？もうこの際どうでもいいや！とりあえず謝ろう。そうだそれがいいそうしよう！

「すいませんまじごめんなさいほんとまじでかんべんしてくださいすいませんでした」

「えっと…やめてくださる？土下座されてそんなに必死に謝られたら私が悪役みたいじゃない」

「あ、ああわかった。とにかくすまなかつた」

「全く…これからは気をつけて欲しいわね」

えっと…許してもらえたのかな？とりあえずまだ顔を確認してないし確認してみるか。俺の知識にある妖怪かもしれないしな

と言うことで顔を上げて相手の顔を確認してみたところ思いつきり知ってる妖怪だったので驚いた

「八雲紫…」

「あら？どうして私のことを知ってるのかしら？あなた生まれたばかりのはずなのに」

「そこは突っ込まないでほしい。というかなんで俺が生まれたばかりだってわかるんだ？」

「私を舐めないでもらえるかしら？それくらいみればわかるわよ」

なるほど…幻想郷の大賢者とも言われてる妖怪だしな。それくらいは見てわかるって訳か

「あと今更なんだけど助けてもらってお礼の一つもないのかしら？」

あ、完全に忘れてた。

「ああ、悪い忘れてたよ。助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。ところであなた、妖怪なんだからなにか能力があるはずでしょう？どんな能力なのかしら？」

「それは俺にもわからない。まだ使っていないからな」

「自分の能力を使う暇もなくやられちゃったのね」

確かにやられたけど、というより幻想郷ってスペルカードルルとか言うのがあったはずなんだけど…さっきの妖怪スペル宣言とかしないでいきなり攻撃してしたんだが…能力なんて確認する前に地面とキスしてただけど

「とにかくあなたの能力を知りたいから使ってみてくださるかしら？」

「それはいいんだけど能力なんてどうやって使うんだ？」

「適当に妖力でも込めてみたら？」

そんなんでいいのか？なんて思いつつとりあえず腕に妖力を込めてみる。妖怪だからなのかは知らないが妖力を込めるのは簡単だった

で、妖力を込めた結果がのこれか…

「腕にそこら中の土がくつついたんだが？おかげで腕が重い。てか肩から外れそう」

「うーん…周りの物を纏う程度の能力かしら？」

「これ使い慣れてきたらあらゆる物を纏えそうだな」

「本人が言うならそういうことなのでしょうね」

本人が言うならって…どう言うことなんだかよくわからんな

「その者の能力のことはその本人が一番理解できるそうよ」

「なるほどな。つまり俺の能力は…」

「あらゆる物を纏う程度の能力ってことかしらね」

「それはいいな。早く慣れないといけないな」